

# サハリン（樺太）探訪

ボーダーフォトグラファー 斉藤マサヨシ

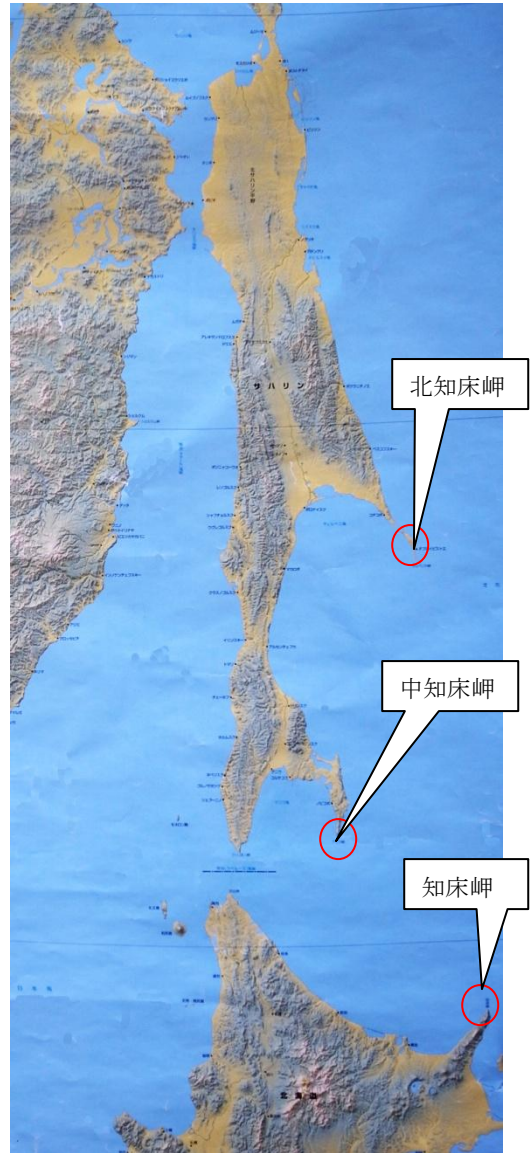
## 北知床岬を訪ねる（2）

### ＝北知床岬を訪ねた最初の日本人＝

北知床岬を最初に訪ねた日本人は間宮林蔵であろう。林蔵は 1808 年上司である松田伝十郎と共に幕府から樺太探検を命ぜられて、北海道宗谷岬から手漕ぎの舟で樺太の最南端にある自主（シラヌシには幕府の番所があった）に渡った。二人は東西に分かれて樺太を探查することにした。東海岸は間宮林蔵、西海岸は松田伝十郎とした。

林蔵は樺太アイヌの道案内で東海岸を北知床岬まで探查している。間宮林蔵が口述して村上貞助編んだ「北夷分界余話」に北知床岬が次のように記述されている『シレットコより奥地凡二十里許にしてピレントーに至る。其の間一大岬ありて、地形大抵タイカよりクキラーに至る海岸ことごとく岩崖、石礫多く、且東大洋に向かう処なれば、怒涛いつも高激して夷舟の往返実になし得ざる処なり』とある。

北知床岬に至った林蔵は、これより北に行くことはできないとして、ここで引き返している。林蔵は樺太の最狭部を横断して松田伝十郎と合流、宗谷に戻り第 1 回目の樺太探検を終えた。しかし、林蔵は樺太探検に数多くの疑問を残したままでは江戸に報告できないとして、再度の樺太探検を願い出るのであった。1808 年の秋に願いは許され、林蔵は単独で樺太に渡って越冬、翌 1809 年大陸に渡り、アムール川中流域に当時あった清朝の仮府デレンを訪ねた。林蔵はこの探查をもとにして詳細な地図を作成。間宮海峡発見の偉業を成し遂げたのである。林蔵が作成した地図には北知床岬、中知床岬共に「シレットコ」と記載されている。当然、北知床岬以北の地名は空白になっているが、林蔵が想像で描いたであろう北樺太の東海岸は現在の地図とほとんど変わらない。正に天才と言わざる得ない。



### ＝地の果てのゲストハウス＝

今、地の果て北知床岬のゲストハウスにいる。電気・水道・ガスなどインフラが無い地の果ての一軒家、どんどころかと思っていた。これが想像に反して以外にも快適である。

自家発電の電気は午後 10 時まで使え、トイレは水洗（水は自分で運ぶ）である。何と WiFi が使えるのだ。携帯電話は当然圏外である。

ラヴィーリさんがゲストハウスに来て、夕食の用意が出来たので、一緒にたべましょうと誘ってくれた。ラヴィーリさんのハウスに行くと、テーブルいっぱいになり、オリガさん手作りの料理が並んでいる。ボルシチ、ウハー（カラフトマスのスープ）、焼き立てのパン、フレップのジャムなど、どれも美味しく、つつい普段の倍ぐらいは食べてしまった（普段は血糖値が高いのでカロリーに気を付けているつもりなのだが）。



北知床岬のゲストハウス

食事の後、ラヴィーリさんがバーニャに入りませんかと言うので、私はびっくり、ここにバーニャがあるんですかと問い返した。ラヴィーリさんは親指を立ててほほ笑んだ。バーニャはロシア式サウナ風呂で、寒いロシアの暮らしには不可欠なものである。

バーニャはラヴィーリさんのハウスの別棟にある。分厚い木の扉を開けると、そこには高湿な熱い空気が充満していた。バーニャには白樺の若葉を束ねたものが置いてあって、それにお湯を含ませてサウナ石や自分の身体に振りたくのが習わしなのだが、ここに白樺の若葉は無い。プラスチック製の柄杓が 2 本置いてあった。これが白樺の代用品だ。柄杓でお湯をサウナ石にかけると熱風が充満して息苦しいくらいだ。しかし、慣れるとこれが何とも言えず心地いい。バーニャで火照った身体のままゲストハウスに戻った。

ゲストハウスに部屋は 3 つあって、ベットは 6 台、ふかふかの寝具は快適な夜を約束するはずであったが、夜中にネズミが動き回ってガタガタ、コトコト耳障りでなかなか寝付けない。窓から月明りが射してくるので、外を見ると満月が煌々と輝いている。眠れないので、外に出て満月と星空を撮影しようと部屋を出たが、ラヴィーリさんから北知床岬の周辺には熊がたくさんいるので、一人で行動しないようにと注意されていたのを思い出した。部屋に戻ってベットに入り、寝直すことにした。

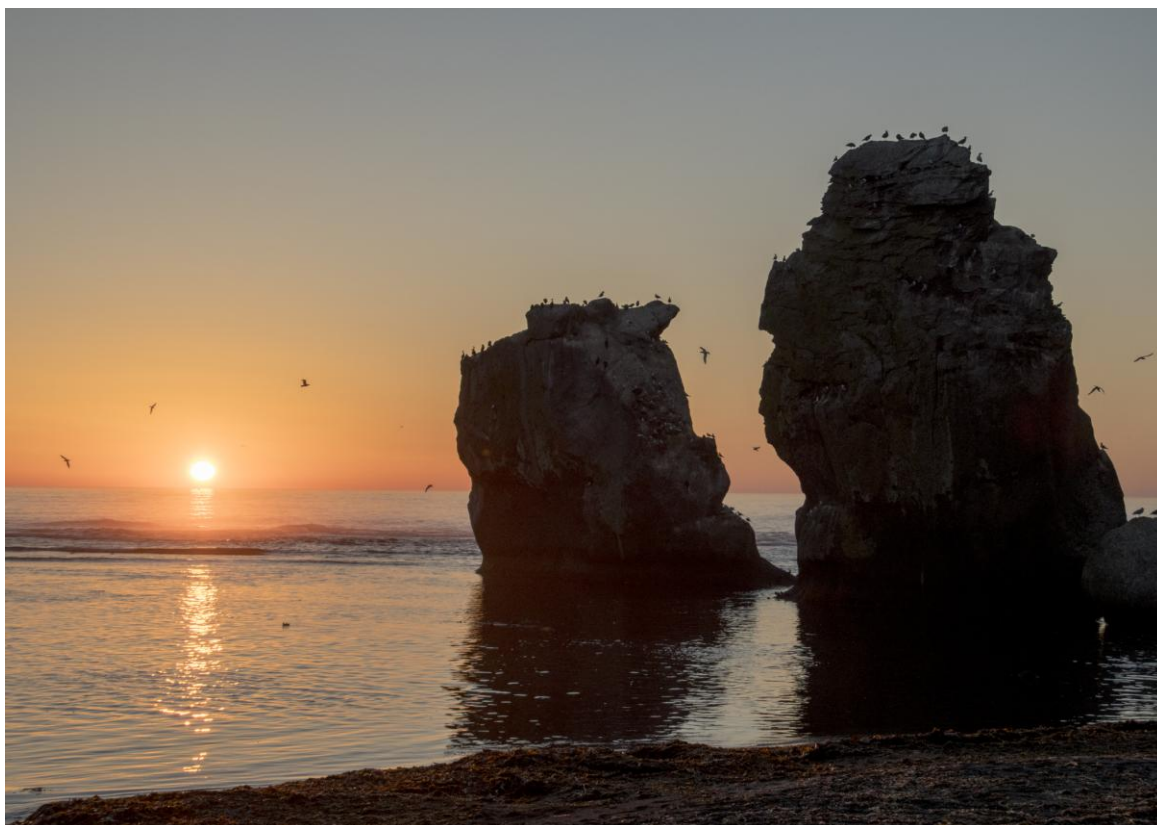
### ＝北知床岬のサンライズ＝

目を覚ますと満月は既に沈み、窓の外は白々としていた。北知床岬のサンライズを撮影しよう。装いを整え、カメラを肩にして外に出た。風が無く、雲も少ない最高の天気だ。撮影場所は昨日から決めていた。北知床岬の突端の海にある二つ岩だ。ゲストハウスから

北知床岬の突端までは 300 メートルほどある。辺りは日の出前でまだ薄暗い。熊に出会ったらどうしようというドキドキ感と北知床岬のサンライズが撮影できるという高揚感が交差して不思議な感覚だ。磯の香りが漂う海岸を歩く足取りがなぜか早くなっていた。

二つ岩に着くと、海鳥たちがかん高く鳴いて岩の周囲を旋回している。ラヴィーリさんによると北知床岬の突端の岩場と二つ岩は海鳥たちの楽園で、6月から8月にかけてオロロン鳥（ウミガラス）やエトピリカなどの貴重な鳥たちが子育てをすとのことであった。今は9月、オロロン鳥やエトピリカの姿は無い。空を舞っているのはカモメ、岩に止まっているのはウミウ、そしてイソシギの仲間が群れている。

水平線にオレンジ色の閃光が見えてきた。北知床岬のサンライズが始まった。地の果てに昇る朝陽の何と美しいことか。海岸の礫地に群生するエゾオグルマの黄色い花も朝陽に映えてきた。朝陽と二つ岩にカメラを向けて夢中でシャッターを押した。熊のことなどすっかり忘れていた。



北知床岬の二つ岩とサンライズ

### ＝旧日本軍のトーチカ跡を訪ねる＝

戦時中の北知床岬は国境防衛の最前線であった。北知床岬の防衛の任務にあたったのは第88師団の歩兵第125連隊であった。歩兵第125連隊の本部は上敷香（現在のレオニードボ）にあって、樺太の北緯50度線国境防衛を任務としていた。この歩兵第125連隊の1個中隊が北知床岬の一带にトーチカなどの要塞を築いて、米軍の潜水艦攻撃に対峙していた。

ラヴィーリさんによると、当時旧日本軍が築いたトーチカが、今も北知床岬に複数残っているという。ラヴィーリさんの案内でこれらのトーチカを訪ねることにした。最初に案内されたトーチカは、北知床岬灯台が見える海岸沿いの砂丘にあった。コンクリートの一部が崩れ、むき出しになったところには直径 15 センチほどの丸太が埋められていた。通常は鉄筋が入るところだが、物資が乏しく丸太を代用して築いたのである。以前に高坂正堯さんの「世界地図の中で考える」を読んだことがある。国民の物資不足は戦争の致命傷のようなことが書かれていた記憶がある。トーチカの中は砂で埋もれていた。

ラヴィーリさんがもう一つのトーチカを案内してくれた。そこは海に少し突き出た小高い丘の上にあった。このトーチカは築いた当時の形が残っていて、中に入ることができた。中には 3 つの観測窓があって 3 方を見張るようになっている。当時、配属されて兵は、この薄暗いコンクリートの中で 24 時間体制で任務を行っていたのであろうと思うと、何かいたたまれない気持ちになった。



旧日本軍のトーチカと熊を見張るラヴィーリさん

私がトーチカの中に入ったり、写真を撮影している間、ラヴィーリさんはトーチカの上に立って銃を構えている。常に熊を見張っているのだ。私は怖いもの見たさで熊に出会いたいという気持ちが少しだけあって、そのことを言うとラヴィーリさんに一蹴された。

## ＝日本時代のカニ缶詰工場跡を訪ねる＝

オホーツク海に突き出た北知床岬の半島は南北に約 100 キロメートルと細長い地形をしている。日本時代、この半島一帯は散江村（チリエ村）で約 2800 人の人々が暮らしていた。散江村には 7 つの国民学校があって、主に漁業で生計を立てていた。

ラヴィーリさんが運転する三菱のジープは、熊の足跡が残る海岸沿いを走っている。右手はオホーツクの青い海、左手は砂丘を覆うハマニンニクが青々と群生している。日本時代はこの辺りに漁家が立ち並び、家々の煙突からは煙が立ち昇る暮らしの風景があったであろう。そんな思いを巡らしていると、眼前に岩山が迫って来た。ダヴィドバ岬（日本時代は用万岬）である。この岬の近くに日本時代のカニ缶詰工場跡はあった。

工場の建物は既に無い。ナデシコが咲く原野に残されているのは、鉄錆びた工場の大型

機械類だ。ボイラーに使われたであろう大きな円筒型の鉄の塊があった。よく見ると燃焼室の蓋に「種田漁場」と浮き彫りがあった。さらに、製造は久保田鉄工場とあった。

今のように冷凍技術が無かった当時は、漁師が獲ってきたカニをここに集荷、缶詰として全国各地に送られた。樺太沿革・行政史によると 1939 年（昭和 14 年）に樺太で水揚げされたタラバガニは 2,562,399 匹とある。内訳は西海岸の真岡の水揚げが一番多く、次が恵須取、本斗と続き、東海岸は下位となっている。

私たちはカニ缶詰工場跡地を後にした。



日本時代のカニ缶詰工場跡



種田漁場の浮き彫り

## =ブルーベリーの森=

今、ジープは原野を走っている。やがて小高い丘の麓に着いた。

ラヴィーリさんが次に案内してくれたのはブルーベリーの森である。そこはハイマツと背の低い落葉樹の森であった。森に分け入ると辺り一面にブルーベリーがたわわに実っている。ラヴィーリさんが言っていたブルーベリーが食べ放題とはこのことか。ここぞとばかりにブルーベリーにむさぼりつく自分がいた。

よく見ると何種類かのブルーベリーがあって、高さ 20 センチほどの低木に実っている楕円形のものが高みに美味しい。北原白秋が 1925 年（大正 14 年）に樺太旅行をしたときの紀行文の表題が「フレップ・トリップ」でこれは「赤い実・黒い実」という意味だ。この時、樺太で白秋が食べて感動した黒い実こそ楕円形のブルーベリーではないかと思った。白秋は現地の住人にこの黒い実は何という名かと尋ねたら「トリップ」と応えたので表題にしたとある。

森を過ぎると高層湿原が絨毯を敷いたように遙か彼方まで広がっている。今度はフレップ（コケモモ）の赤い実がそこら中に実っている。口に入れると甘酸っぱさが充満する。湿原にはトナカイの足跡がたくさん残されていた。トナカイも湿原の恵みを食べているに違いない。



地の果てに広がる高層湿原



フレップ (コケモモ)



ブルーベリー

この後、ゲストハウスに戻ってラヴィーリさんの妻オリガさん手作りの夕食をいただいた。そしてバーニャで身体を温めてベットに入った。明日は帰る日である。

最高の朝を迎えた。無風で海は鏡のように波一つ無い。空はどこまでも青く、雲一つ無い。ラヴィーリさんは「こんな日はめったにない」と上機嫌だ。帰りは船でチュレニー島（海豹島）に寄ってからポロナイスクまで海を直行する。陸揚げしてあるプレジャーボートをソ連軍払い下げの水陸両用車両で引いて海に下した。私たちは帰路に着いた。

ラヴィーリさんの案内で巡った地の果ての3日間は、私の心の奥底に深く焼き付いた。



ソ連軍の水陸両用車でボートを下す